

静脈注射認定看護師（IV ナース）育成WG

IV ナース育成 WG の概要・活動

目的：静脈注射認定看護師（IV ナース）の育成を継続し、静脈注射に関する質を担保する。

- 目標：1) 静脈注射認定看護師（IV ナース）の認定率が 98%以上となる。
 2) 静脈注射認定看護師（IV ナース）の更新対象者全員が認定を更新できる。
 3) 静脈注射教育プログラム・更新制度を企画・運営・評価し、課題について方策を立てることができる。

令和 7 年度は、WG 会議を年 6 回開催し、年間目標・活動計画を立て活動した。WG は Web 会議を使用したハイブリッド形式で開催し、別府病院の副看護師長 1 名が構成員として加わり、計 13 名のメンバーで活動を行った。

静脈注射教育プログラムでは、対面での講義や演習に加え、ナーシング・スキルでの事前動画視聴を活用した。年 2 回の講義・演習・筆記試験の実施について担当を決めて取り組み、WG で進行状況を確認し、情報交換を行った。新人看護職員の演習では、教育 WG のメンバーの協力を得て指導を行った。静脈注射を実施する際の療養環境がイメージしやすいよう WG メンバーが動画を作成し講義後に受講者全員で視聴した。演習前に動画視聴をすることで、演習開始がスムーズになり、静脈留置針の穿刺の練習時間確保につながった。

認定率については、育成対象者の累計 IV ナース認定率の目標を 98%とし、各部署での実技試験の進捗状況を把握するとともに、部署間研修を活用するなどの取り組みにより認定率向上を目指した。

また研修実技指導においては、実技指導案を活用し、WG メンバーが前年度の研修指導の振り返りで出た意見を活かしながら取り組み、発展的に活動を行った。

IV ナース認定更新については、確実に対象者を把握するとともに最新の知見やスキんテア予防に関する内容を盛り込んだ設問内容を追加し、更新テストの質の向上に取り組んだ。

【IV ナース育成 WG 構成員】

職位	所属
看護師長（3名）	南棟 8 階 2 病棟、北棟 11 階 2 病棟、教育担当
副看護師長（5名）	北棟 10 階 1 病棟、手術部、感染管理担当、教育担当、別府病院
看護職員（6名）	南棟 6 階 1 病棟、南棟 6 階 2 病棟、南棟 11 階、北棟 9 階 2 病棟 教育担当より 2 名

令和 7 年度 実施計画

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
日		7		1		2		4		6		3
WG 活動内容		第 1 回 ・年間活動計画立案 ・6月研修準備・打ち合わせ		第 2 回 ・6月研修振り返り ・指導案の見直し		第 3 回 ・活動中間評価 ・更新テスト準備開始		第 4 回 ・1月研修準備・打ち合わせ ・キャリアセンター報告書分担 ・更新テスト準備		第 5 回 ・1月研修準備・打ち合わせ ・キャリア報告書作成		第 6 回 ・1月研修振り返り ・年間活動評価
			研修（既卒者・地域公開） ・講義（4日） ・演習（6日） ・試験（18日、既卒者のみ）						認定更新テスト 12月～1月初旬		看護キャリア センター報告書 作成期間	
										研修（新卒者） ・講義（8・9日） ・演習（22・23日） ・試験（26日）		

令和7年度 実施状況

1. 静脈注射認定看護師育成WGの開催

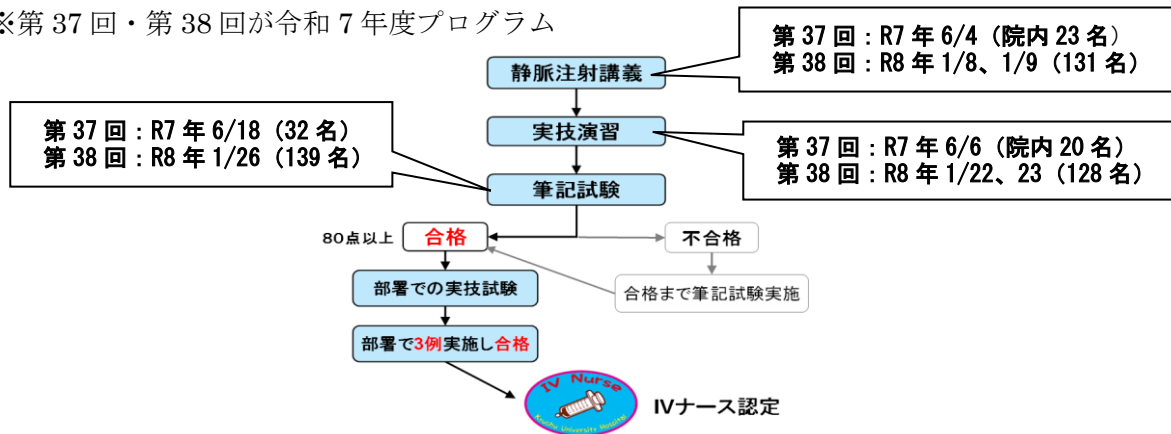
開催回	日時	主な議題
第1回	令和7年 5月7日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・IVナース育成WGについて ・年間活動目標および活動計画、各役割分担について ・第37回静脈注射教育プログラムについて（6月開催）
第2回	7月1日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・IVナース育成WGについて ・年間活動目標および活動計画、各役割分担について ・第37回静脈注射教育プログラムの振り返り ・看護キャリアセンターセミナーについて
第3回	9月2日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・IVナース更新制度について ・看護キャリアセンターセミナーについて
第4回	11月11日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・ワーキング構成員について ・IVナース認定更新テストについて ・演習指導案と司会進行について ・看護キャリアセンターセミナーについて ・IVナース認定率について ・令和7年度キャリアセンター報告書について
第5回	令和8年 1月6日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護実践研修8（静脈注射認定看護師育成研修）について ・看護キャリアセンター報告書について
第6回	3月3日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・看護実践研修8振り返り ・令和7年度看護キャリアセンター報告書について ・1年間の振り返り

※第2～5回でグループ活動を実施

2. 令和7年度静脈注射教育プログラム

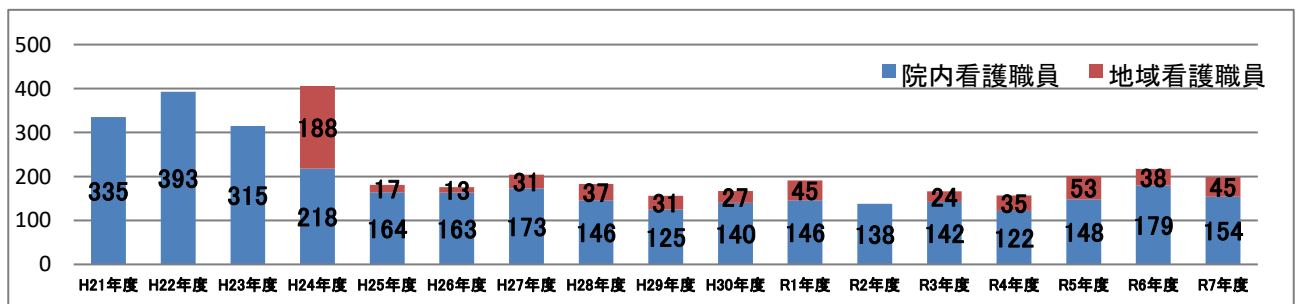
1) IVナース認定フロー図と令和7年度プログラム受講者

※第37回・第38回が令和7年度プログラム



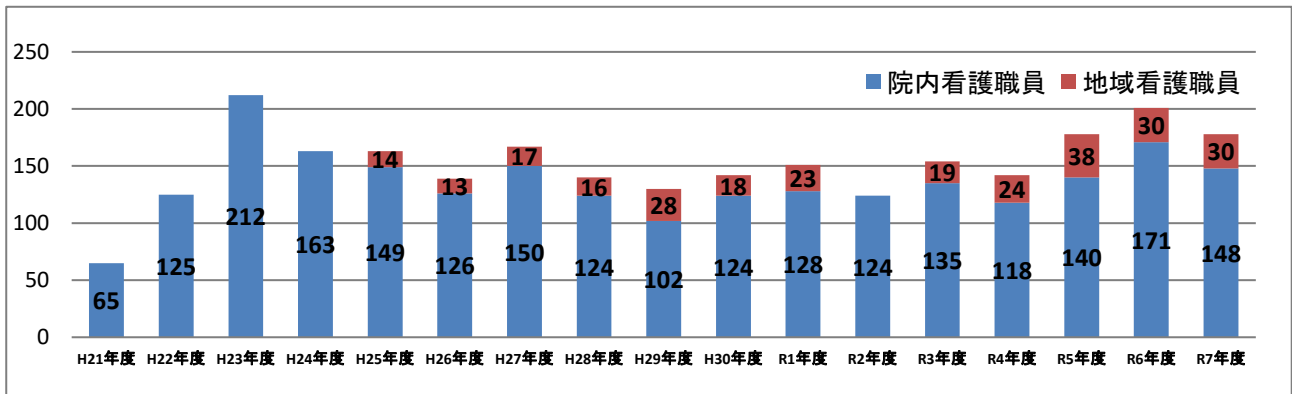
2) 静脈注射教育プログラム受講者年度累計

(1) 講義受講者数推移



講義受講者数 延べ 3785 名（地域看護職員受講者数 延べ 207 施設 584 名）

(2) 実技演習受講者数推移



実技演習受講者数 延べ 2574 名（地域看護職員受講者数 延べ 123 施設 270 名）

3. 静脈注射認定看護師（IVナース）認定更新制度

静脈注射に関する看護の質の維持・向上を目的に、『静脈注射認定看護師（IVナース）認定更新制度』を実施している。対象者は、認定後、5年ごとに更新しており、IVナース認定制度開始以降、令和6年度からは、3回目の認定更新となる看護職員もいる。看護職員は更新制度により静脈注射に関する知識及び技術を定期的に再学習することができ、看護ケアの質を継続的に担保することができている。

学習環境として、九州大学 Web 学習システム・看護部 eラーニングでの静脈注射教育プログラムの講義や資料を整備しており、様々な環境で自己学習ができる体制が整っている。

【令和7年度 静脈注射認定看護師（IVナース）認定更新制度】

1) 対象：IVナース認定後5年目の看護職員 58名（別府病9名含む）

IVナース認定更新2回目以降の看護職員 135名（別府病院11名含む）

2) 方法

(1) 九州大学 Web 学習システムの看護部 eラーニングの令和7年度の静脈注射教育プログラム講義資料を使った自己学習（任意）

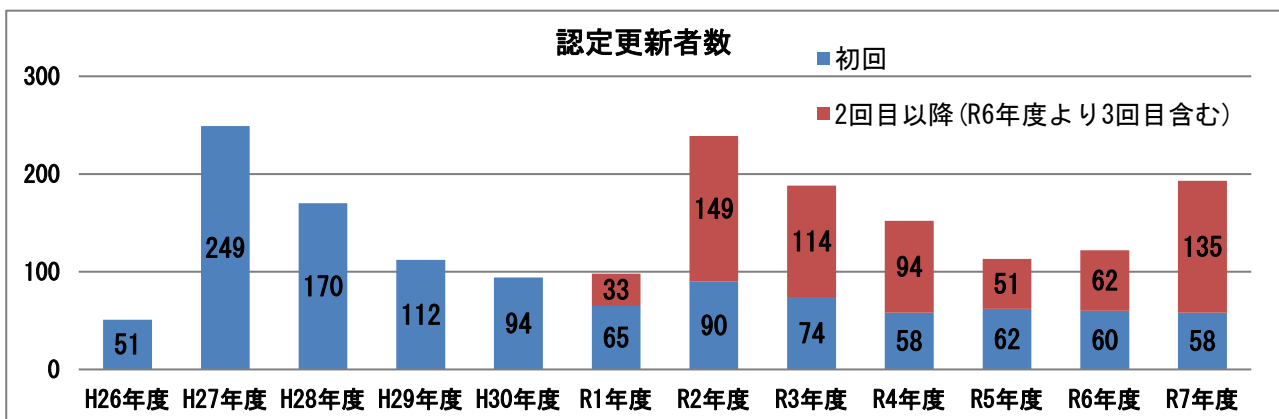
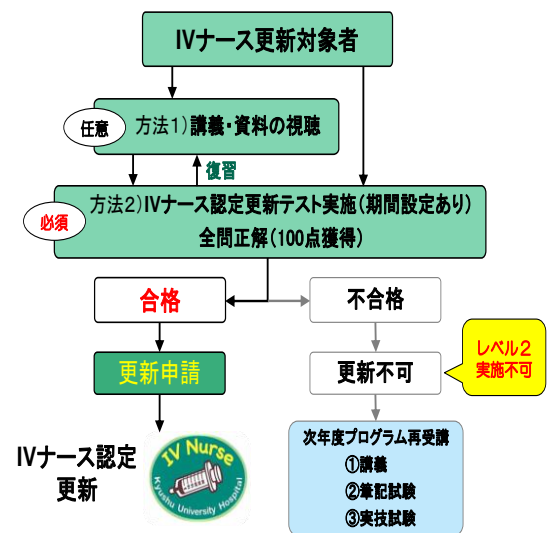
(2) 九州大学 Web 学習システムの看護部 eラーニングの「IVナース認定更新テスト」を実施。

全問正解（100点獲得）まで繰り返し自己テストを行う（必須）

【期間】令和7年12月4日～令和8年1月4日

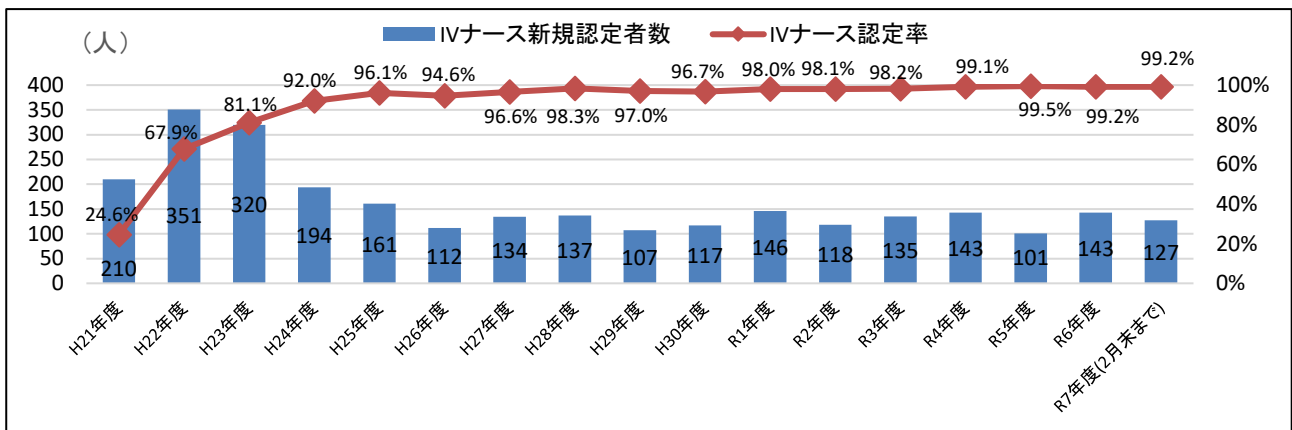
(1) 対象者が認定更新を申請後、IVナース育成WGで「IVナース認定更新テスト」の結果を確認し、看護部へ報告する。

(2) 看護部で認定し、IVナース更新認定証を発行する。



令和7年度 成果

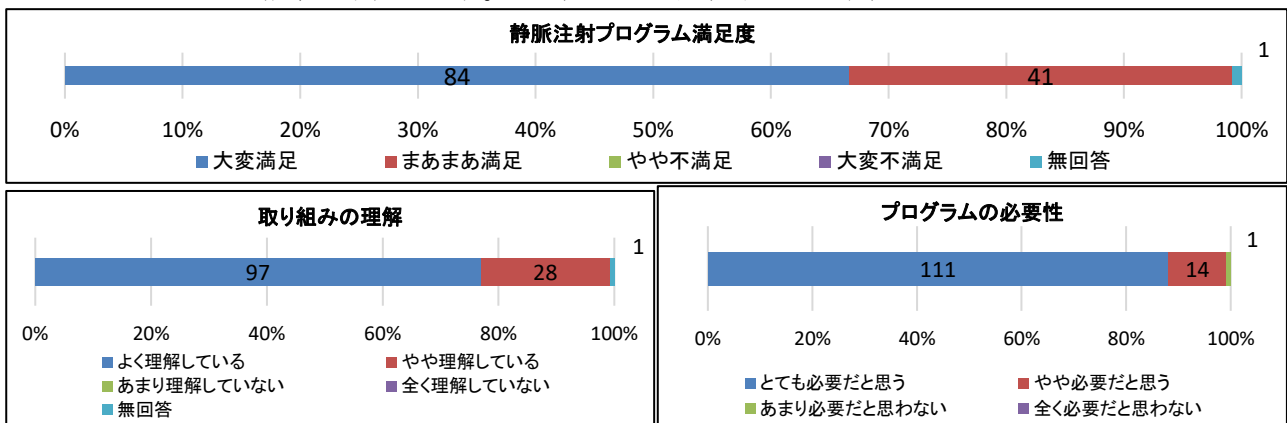
1. 静脈注射教育プログラム目標達成状況



令和7年度は新規に127名のIVナースを育成し、令和8年2月末時点でのIVナース認定率は99.2%であった。

2. 令和6年度静脈注射教育プログラム（第35回・第36回）評価

令和6年度に実施した第35回・第36回の静脈注射教育プログラムについて、IVナース認定後に実施したアンケートの結果を下記に示す。（n=126 回答率：65.3%）



感想・意見（一部抜粋）

講義から実技練習、筆記テストまで徹底したプログラムがあり、IVナース認定まで不安なく取得できた。知識や技術についてはまだ不安があるため日々の業務の中で習得に励みたい。

手厚いプログラムを設けていただいているおかげで自信と正しい知識をつけて実践できると感じている。

アンケートの結果より、プログラムを受講した者すべてがプログラムの内容を肯定的に捉えており、ほとんどの者がこのプログラムの必要性を感じていた。また本プログラムがあることにより部署全体で静脈注射認定看護師の育成に取り組む様子が見られていた。本結果を受け、令和7年度も継続した活動を実施した。

3. 令和7年度静脈注射認定看護師育成研修（第37回・第38回）評価

令和7年度静脈注射教育プログラムとして、第37回静脈注射認定看護師育成研修（6月）、第38回静脈注射認定看護師育成研修（1月）を実施した。

第37回は地域公開とし、地域の看護職員と院内看護職員との合同で行った。院内看護職員の多くは令和7年度入職の既卒看護職員であった。

第38回は令和7年度新卒看護職員を対象に実施した。また、第37回においては診療放射線技師へ研修を実施した。（令和3年10月1日付け診療放射線技師法の一部改正に伴う業務拡大のため）

(1) 第37回静脈注射認定看護師育成研修評価

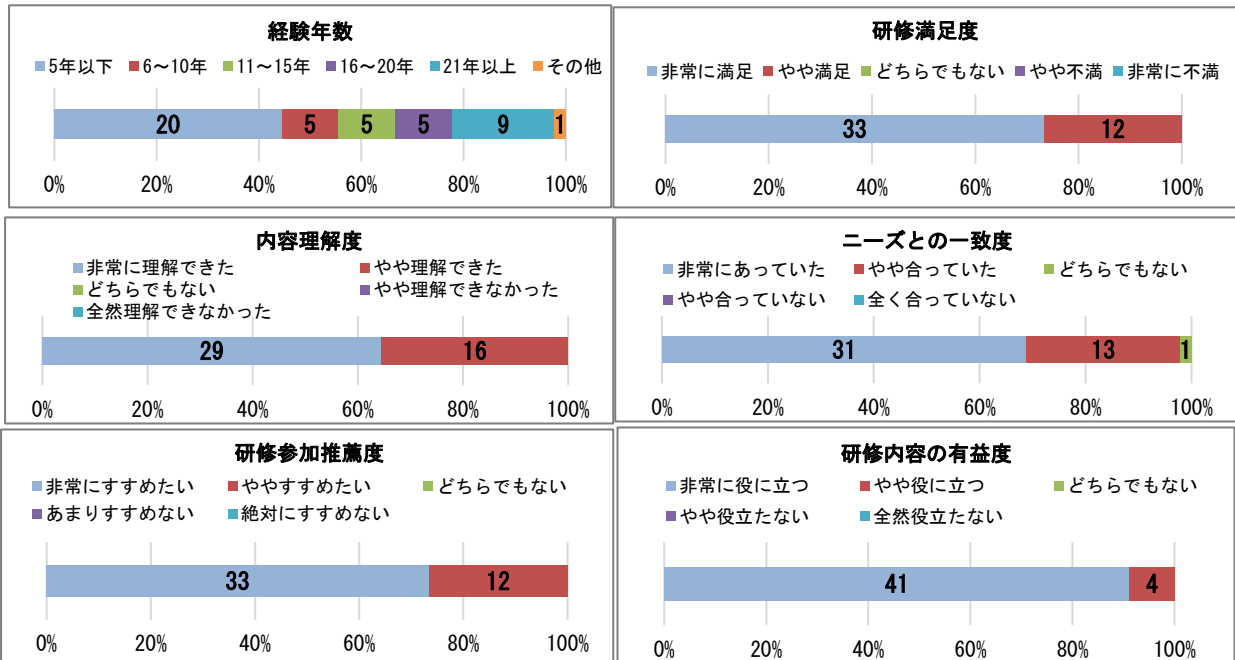
①講義

令和7年6月4日（水）に実施し、受講者は地域看護職員45名、院内23名（別府病院2名、診療放射線技師1名含む）計68名であった。

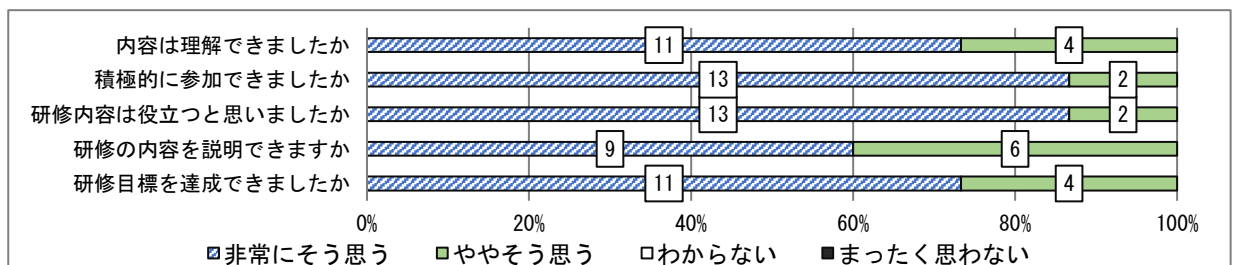
【講義内容】

内容	講師
静脈注射における看護師の役割 —看護業務と法的責任—	教育担当副看護部長
静脈注射に関する無菌的操作と感染管理	感染管理担当看護師長 感染管理認定看護師
静脈注射に必要な解剖生理、合併症・危険性と対策	手術部 助教
静脈注射に関する安全管理と事故防止	医療安全担当看護師長
薬剤に対する基礎知識	薬剤部 副薬剤部長
静脈注射を受ける患者の看護	静脈注射認定看護師育成WG 総合外来看護師長

【地域看護職員講義後アンケート】（n=45 回収率：100% 看護職経験年数：平均11.5年）



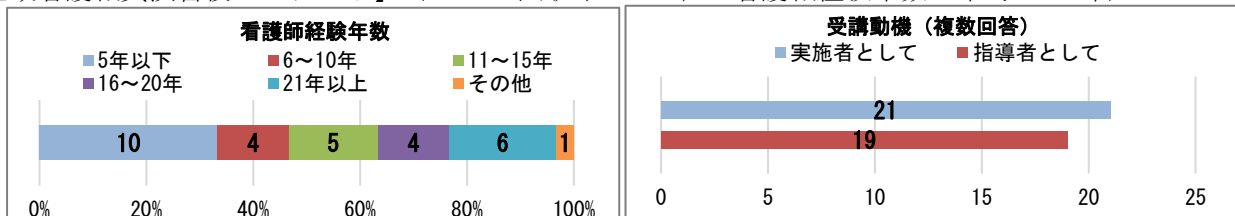
【院内看護職員講義後アンケート】（n=15 回答率：75.0%）

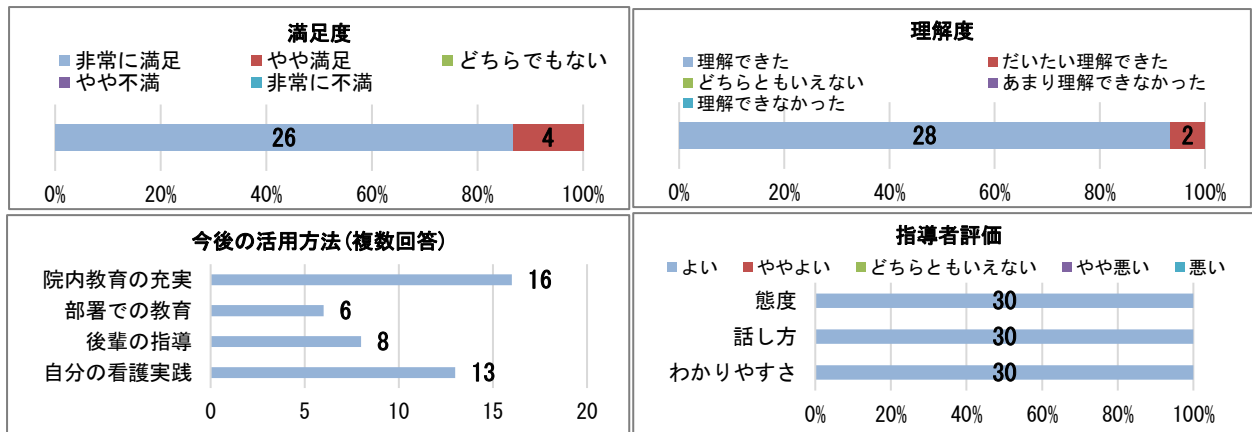


②実技演習

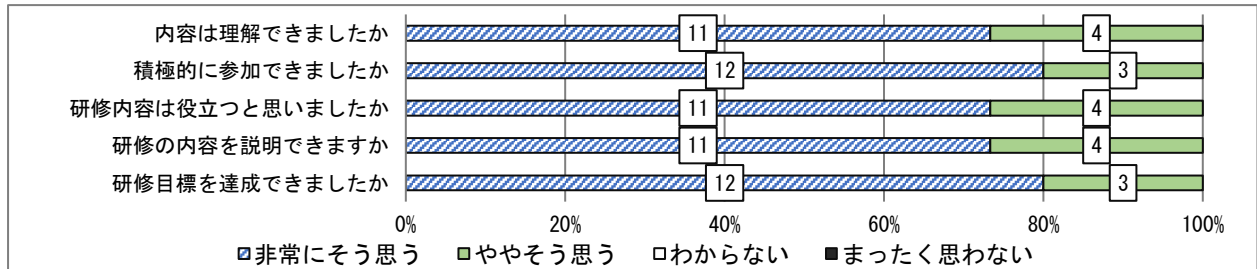
令和7年6月6日（金）に実施し、受講者は地域看護職員30名、院内20名、計50名であった。手技に関する動画講義を視聴後、静脈採血注射モデルを使用し、75分間の演習を行った。

【地域看護職員演習後アンケート】（n=30 回収率：100% 看護職経験年数：平均12.8年）





【院内看護職員演習後アンケート】(n=15 回答率: 78.9%)



③筆記試験

令和7年6月18日(水)に実施した。

【地域看護職員】感想・意見(一部抜粋)

静脈注射という行為一つに対して、法的、感染、確認手順、薬剤、医療安全など多方面からの講義があり、自分が普段から行なっていることの意味や理由を改めて考えることができた。今回学んだことを自身に取り込み、当院での看護に役立てるように活かしていきたい。

新人教育において、統一した手順で静脈注射を実施できるよう、今回の学びを院内教育に活かしていきたいと思いました。

基本的なことから、あまり知らなかった法的なことまでさまざまな分野の講師から学べてよかったです。自部署で新卒や中堅、そして自己流になってしまっているようなベテランにも、今日の学びを伝達していきたいと思います。自分の振り返りにもなり、本当によかったです。

【院内看護職員】感想・意見(一部抜粋)

基本的な知識を再確認し理解することで患者に対して安全かつ確実な看護実践をしていきたい。

マニュアルにそったやり方や技術を習得することで、安全面や感染面を配慮し安全な静脈留置になると思った。今後、繰り返し練習し正しい方法で実施できるようにしていく。

静脈注射に関する知識の再確認に加え、法的責任や安全管理といった根拠に基づく理解が深まり、受講者の安全意識向上につながったことが示された。特に地域看護職員からは、自施設での教育や後輩指導への活用を意識した意見が多く、研修内容が教育資源として波及する可能性が考えられる。一方で、院内看護職員は既卒看護職員が対象であったため、本研修で当院のマニュアルの把握や手技の再確認が進み、安全な静脈注射の実践向上につながる学習効果があったと考える。

本研修は、受講者自身の実践改善に加え、院内教育や地域への展開を見据えた学習効果が認められた。今後も、継続的に実施することで、静脈注射に関する安全で標準化された実践の定着が期待される。

(2) 第38回静脈注射認定看護師育成研修評価

①講義

令和8年1月8日(木)、1月9日(金)に実施した。受講者は令和7年度新卒看護職員131名、

別府病院 5 名（zoom にて参加）であった。講義内容は第 37 回静脈注射教育プログラムの動画講義の視聴を行い、「静脈注射を受ける患者の看護」のみ本 WG 構成員による対面講義を行った。

1 月 8 日（木）	手術部 副看護師長
1 月 9 日（金）	北棟 11 階 2 病棟 看護師長

講義終了後、ナーシング・スキル®にて「静脈注射：静脈穿刺（末梢静脈路確保）」「静脈留置針挿入実施前後の療養環境について」の動画を視聴し、実技演習に備えた。

②実技演習

令和 8 年 1 月 22 日（木）、1 月 23 日（金）に実施した。受講者は令和 7 年度新卒看護職員 134 名であった。

事前学習：実技評価表を見ながら先輩の手技を見学する。ただし、実施機会の少ない部署はナーシング・スキル®の動画を繰り返し視聴する。成人の静脈血採血の実施機会が少ない部署は駆血帯の巻き方を復習する。

演習：少人数制で実技評価表に沿い、静脈採血注射モデルを用いた静脈留置針・翼状針の演習を実施した。

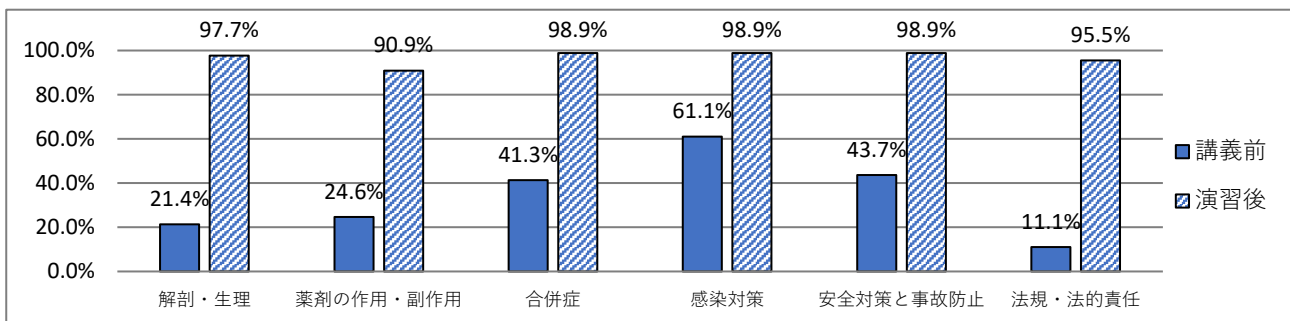
③筆記試験

令和 8 年 1 月 26 日（月）に実施した。

【アンケート結果】（講義前：n=126 回収率 96.1%、演習後：n=88 回答率 66.7%）

講義前と演習終了後に静脈注射に対する知識と理解度に関するアンケートを実施した。

6 つの分野に対し、知識と理解度が「十分にある・まあまあある・あまりない・全くない」の 4 段階評価のうち、十分にある・まあまああると回答した者の割合を示す。



感想・意見（一部抜粋）

実施者としての責任を十分に持って、実施する際には薬理作用や合併症のリスクまで考慮して安全に実施するようにしたい。

患者の療養環境を整えてから実践に入ることや、一つ一つの動きでの声かけなど細かなことを学ぶことができたため、他の看護実践においても活かすことができると思った。

2 人 1 組になって行ったため、アドバイスし合い、学びを深めながら演習を行うことができた。

薬剤の知識、静脈注射の技術と知識を十分に身につけ、業務中に分からないことは先輩に聞いたり、学習して必ず分かるようにして、患者さんに安全な実施ができるようにしていきたい。

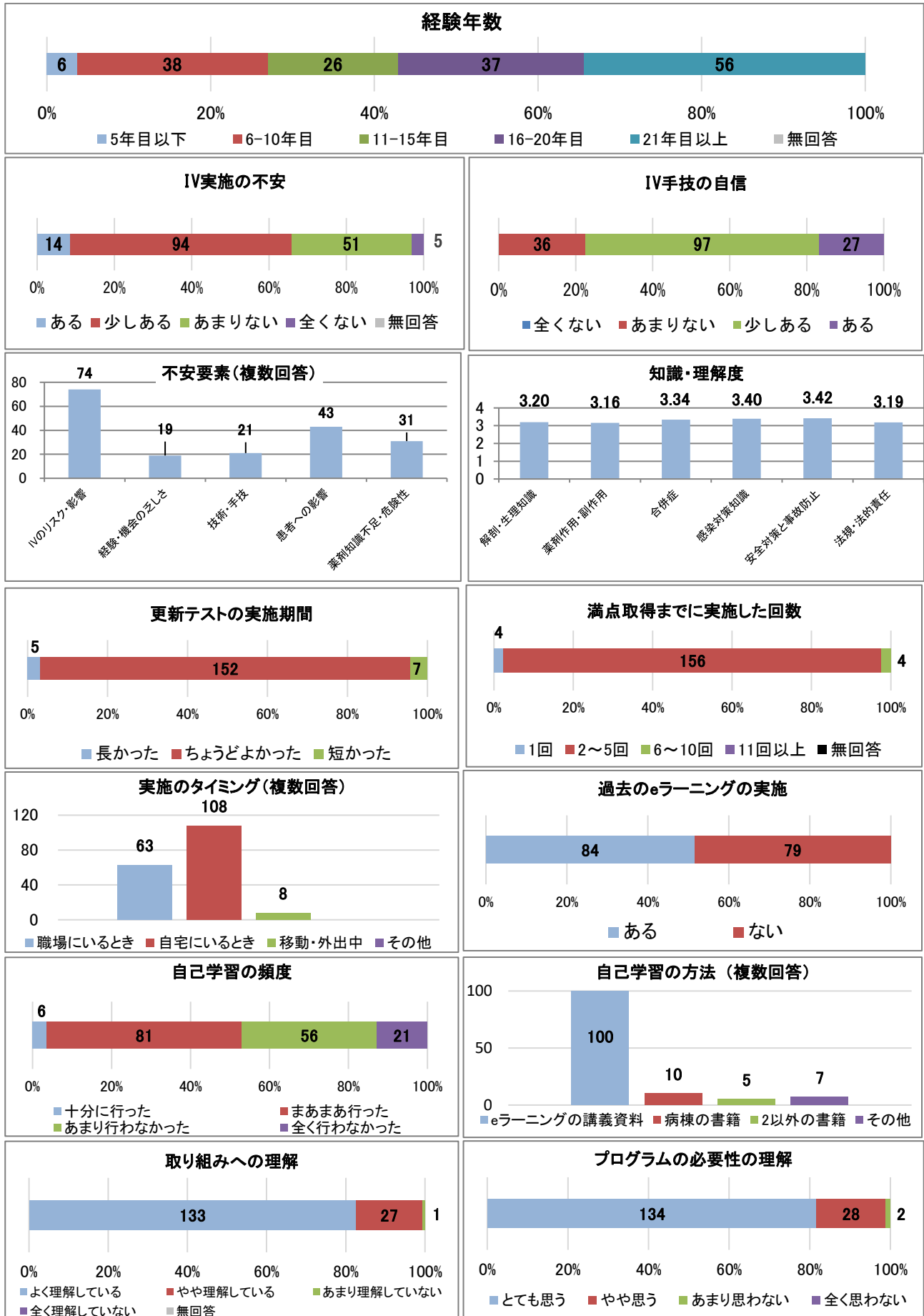
静脈注射に関する知識と理解度は、講義前から実技演習後ですべての項目において大きく上昇した。講義で知識を身につけ、実践を意識した演習に取り組むことでより深い理解に繋がったと考えられる。

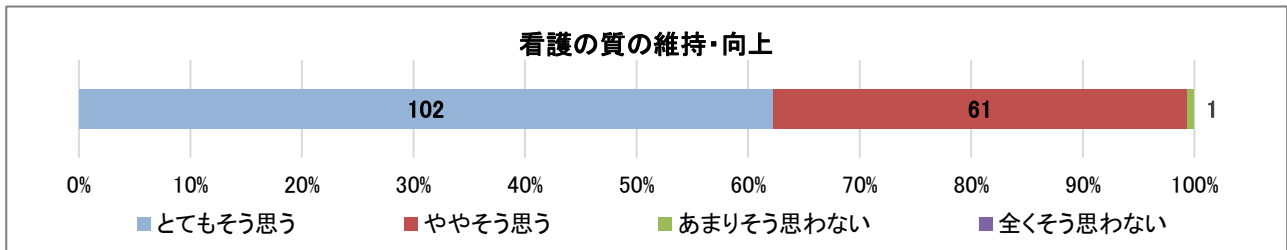
事前に部署での手技見学や動画視聴で手順を確認して演習に臨んだことにより、90 分という演習時間を有効に活用できていた。集合研修では、基本的な手技の流れを行ったため、筆記試験合格後は部署や患者の特徴を意識した OJT で支援することが必要である。

2) IVナース認定更新制度評価

令和7年度は看護職員190名（別府病院20名を含む）を対象に実施した。対象者全員が認定を更新し、更新率は100%であった。

【認定更新試験受験者アンケート結果】（n=164 回収率86.3% 看護職経験年数：平均17.1年）





感想・意見（一部抜粋）

静脈注射は合併症を起こすリスクがあり、知識をしっかりと持ったうえで実践していきたい。

忘れかけている知識の復習や普段あまり使用しない薬剤の知識などを学ぶことができたため、日頃の業務に活かしていきたい。

認定更新制度があるからこそ、自分が静脈注射の手技を開始して以降に主流となっている EBP（Evidence-Based Practice：根拠に基づく実践）についても、遅れることなくアップデートし、安全に実践できると感じた。

更新テスト実施が看護の質の維持・向上に繋がっていると肯定的な回答をしたスタッフは 99.3%であった。静脈注射実施に関する不安を 65.9%が感じており、不安要素として「IV のリスク・影響」が最も多く、次いで「患者への影響」「薬剤知識不足・危険性」であった。知識・理解度は各項目 3 点以上となっており、更新テストを実施することで、静脈注射の再学習の機会となり、知識の再確認や向上に繋がると考え、不安の軽減に繋がると考える。多くの看護師が更新テスト実施は看護の質の向上に繋がり役に立つと答えており、IV ナース認定更新制度の継続により静脈注射に関する看護の質担保・維持に繋がっていると考える。

広報活動

看護キャリアセンターホームページで、IV ナース育成 WG の活動報告を行った。



今後の展望

IV ナース育成 WG では静脈注射認定看護師の育成、認定率の向上並びに円滑な認定更新を目標に、静脈注射教育プログラム及び認定更新制度の企画・運営を行うことができた。「実技評価表」に即した実技指導案を活用して演習指導を行うなど発展的な WG 活動を行うことができた。また、臨床放射線技師や地域看護職員へ研修を行う中で、当院の看護職員と関わるだけでは気づくことのできない指導者としての視点も得ることができたと考えます。

今年度の静脈注射認定看護師の認定率は 99.2%であり、目標の 98%以上を達成することができた。これは認定取得に向けた WG メンバーの働きかけや、各部署での取り組みの強化、部署間研修等を活用した積極的取り組みの成果であると考えます。また認定更新制度では今年度の対象者全員が更新を完了し、WG の目標を達成することができた。WG 活動の中で、最新の知見やインシデント情報をもとに更新テストの問題を見直したことで更新者のさらなる知識向上にも繋がったと考えます。

WG メンバーは 1 年間の活動を通して、静脈注射に関する教育や静脈注射を行う看護師の質を担保・維持することの重要性を実感でき、自部署での静脈注射教育や認定更新の推進について、より積極的にスタッフに関わることができていた。実技評価表に即した実技指導案を活用し、前年度研修の振り返りで出た意見を反映させることで、統一した効果的な実技指導を行うことができた。また別府病院の WG メンバーと連携し、協働して活動を行うことができた。

認定更新が 3 回目を迎える職員も増えてきており、更新対象者を正確に把握するための仕組みづくりが今後の課題となる。また、長期休暇後に復職する職員への教育支援にも力を注ぎ、静脈注射に関する看護実践力のさらなる向上に貢献できるよう、継続して取り組みを進めていく。